



ストックとしての人間

新野 幸次郎

長く勤務した企業を定年退職して何をする意欲もなくなった人を産業廃棄物だといった人がある。えげつない言い方だが、しかし、企業によってはそういわれなくても仕方ない人の使い方をしている所がいまでもないとはいえない。それは人間を、とりかえ可能な、フローとしての生産要素として考えることを意味する。これは本来の人間のあり方を考えると、余りにも悲しい扱い方である。しかし、人間がフローとしての取り扱い方から脱却するためには、何よりも自らをストックとしての人間に変えてゆく努力をしておかねばならない。ストックとしての人間とは、他の人と簡単にとりかえができない、独自性、なんらかの重要な稀少性をもった人間のことである。

その点留意しておかねばならないのは、コンピュータの発達である。いままで、人間の特性は、豊富な知識・情報を蓄積している点にあると考えられてきた。しかし、単なる知識の蓄積や整理なら、今日ではコンピュータの方が優れているといえないことはない。その意味では知識をストックしているからといって人間そのものがストックになったという訳にはゆかないようになった。

ストックとしての人間は、単に知識や情報をもっているだけでなく、それらを色々な状況に応じて運用する能力、新しい発想と方法を発見できる能力、多くの異なった能力をもった人たちを統合させる能力、こうした諸能力のどれかを自分の身体に身につけて、その周囲の人々がその人のもっているものを何としても伝承したい、引き継いで自分のものにしたいと思うような人間でないといけない。

こう考えてくると、ストックとしての人間などという言い方は一見奇を衒った言い方のようにみえるが、実は誰も考えてきたことにすぎないことが判るであろう。

—昭和24年卒、(社)凌霜会理事・神戸大学長—